

# 獲ノ海にまつわる物語

帆下ほさげ天神てんじん

今は昔、獲ノ海を通航する帆掛舟ほかけぶねはこの社の前を通過するときには、帆を下げて通らないと神罰があるといひ伝えられており、亀山の神前神社・道口の八幡宮には、それぞれ似たような話が伝えられている。

神前神社かみまへじんじゃ 昔この付近一帯が海であったころ、この神前神社のある台地を「天神が鼻」と呼び、この岬を通る時には帆を降さなければならなかったといわれ、「帆落し天神」ともい

祭神は猿田彦命さるたひこのみこと・素戔嗚命すさのおのみこと・天穗日命あめのほひのみことと伝えられ、もとは「天王山てんのうざん」にあったものを江戸時代初期の延宝六年（一六七八）に現在のところに遷宮したと伝えられている。

（天王山という地名は午頭天王を祀ったことによるものらしい）

く、午頭天王とは素戔嗚命を仏教流に呼びならわしたものといひ、疫病除けの神としてあがめられている。

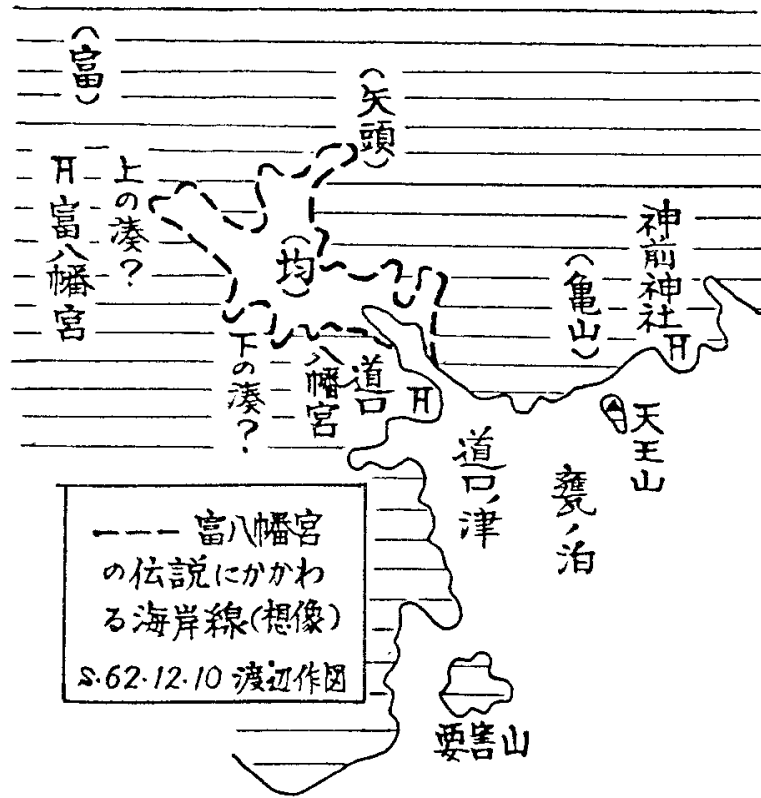
道口八幡宮みちぐちやっぴんぐう 帆下げ天神や「棟の下駄おぼろげだ」の伝説については、神前神社とも同じものが伝わっているといわれ、御神体が棟へせんだんの木で作られているので、氏子たるものが棟で作った下駄をはく者があれば、たちまちに神罰があたると恐れられていた。

祭神は神功皇后じんこうこうごう・応神天皇おうじんてんのう並びに大己貴命おほなむらのみこと・玉依姫命たまよりひめのみこと・祓戸神はらへどのかみと伝えられているが、その昔このあたり一面が大きな入江の海であったころ、大己貴命・玉依姫命を祀り海上の安全を祈った。しかし、時代がくだり、住民の氏神（御崎神社）が下竹しもたけにあって参拝に不便であるといふことから遷宮して、ここに合祀したということである。

富八幡宮とみとその由来

富八幡宮は「御崎

神社」と「八幡神社」との両方の性格をもって  
 おり、道口八幡宮にも同じことがいえる。  
 祭神は、玉依姫命（御崎様）、仲哀天皇・赤  
 神天皇・神功皇后（三柱は八幡様）と伝えられ  
 ている。



大昔、道口ノ津から富の山麓まで深く海が湾  
 入していたころ、富を「上の湊」・轟（位置不  
 明）というところを「下の湊」と呼び、住民は

漁業を本業としており、農業をすむ者も舟に乗  
 って商に出る者もあつたといわれている。

聖武天皇の御代のころ（八世紀後半）此の地の  
 湊屋久六というものが九州宇佐八幡宮に参詣し、  
 あらたかなおかげに感心し、自分の里に氏神が  
 ないので此の神体を勧請し、御幣を持ち帰って  
 社殿を建てて人々と共に祀ったのがはじまりと  
 いう。

そのおかげにより、此の里の漁夫は特別に獲  
 物が多く村中が富み栄えたので、世の人々がう  
 らやんで「富の湊」というようになり、いつし  
 か地名になったと伝えている。

「御崎宮とその由来」 今は昔、富の「下の  
 湊」に沖元屋与太郎という漁夫が住んでいて、  
 毎日沖合の乙島・柏島あたりに出かけて漁をし  
 て暮っていた。

或る日のこと、御崎という出島の前で網を引  
 くと、次々にたくさんな獲物で時のたつのも忘  
 れて、気がついた時にはもう潮が引いてしまっ

て帰ることができなくなった。日も暮れようと  
しているのだがどうすることもできず、しかた  
なしに潮が満ちてくるまでじっと待っていた。

そのうち、ふと干潟の泥の中に何やら光るも  
のをみつけ、拾いあげて潮のたまりで洗ってみ  
ると、金色燦然たる御神体でした。与太郎は大  
へん有難く思い潮の満ちて来るのを待って、う  
やうやしく奉じて帰途についた。

ところが一方、下の湊の人々は沖を眺めてび  
っくり。それというのも、夜の海を何百何千と  
いう舟がみな灯火をつけてこの浜をさして来る  
様子。しかし、近寄るにつれて、いつのまにか  
灯火も舟も消え失せて、与太郎の舟がただ一隻  
その家の前の浜に着いただけで、人々はまた二  
度びっくり。

与太郎を取りかこんだ村の人たちは、口々に  
奇怪な出来事を話した。与太郎は御神体を拾い  
上げたことを物語り、たくさんの灯火は八百萬

の神々が共に守護なされて湊入りされたのだら  
うと話し、舟の底からうやうやしく御神体を取  
出して、わが家の清浄なところへお祀りした。

そのうち、あらたかな靈驗を伝え聞いて参拜  
する近郷の人も多くなったので、新しく社殿を  
建てて遷宮した。これが御崎宮のはじまりとい  
われている。

また、この神様はもと干潟に現われたので、  
お祭りの日には氏神山のうち観音鼻という所へ  
出て、お供物をそなえて沖の方へ向って「潮が  
満ちたか、干いたか」と大声で呼ぶという習わ  
しがあったと伝えられている。

下の湊の轟というのは与太郎の舟が数千の灯  
火と共に湊入りするのを見て、村の人々が驚き  
立ちさわいだことから名付けられたという。

また、この神が船にゆかりがあることから、  
この神を信心する船人や氏子は一生海難を免か  
れること疑いなしとも伝えられている。

「おんざき」又は「みざき」信仰について」

御前・御先・御崎などの文字が使われているが、「オン」「シン」は敬称。「ザキ」は先・前で「けわしい」「とがった」「際」等の意味をもち先端を示す語であり、また岬にも通じるものがある。中四国地方では、非業の死を遂げた人の霊・行（ゆき）の神・憑（つ）きもの・村境の神などを「ミサキ」と呼び、水辺に出現するものが多いという。

岡山県では「ミサキ」と屋敷神、一族の守護神としているところもあるが、いずれも崇（た）神（かみ）的（てき）性格（せいかく）が強いといわれる。また、カラス・キツネなどの動物を「ミサキ」といつところもあるが、「ミサキ」とは本来神の出現の先触れを示すものともいわれ、強い霊力（れいりき）を持っているので、神（かみ）が定着（ていさく）するとともに崇（た）神（かみ）的（てき）性格（せいかく）に変化（へんか）していったものであろうといわれている。

唐船（からぶね）と

唐神宮（からかみみやう）

唐船（からぶね）という地名が最初に出てくるのは江戸時代の初めごろへ十七世紀初頭（はつしう）といわれているが、当時はこのあたりは潮の流れの速い水道で、しかも暗礁（あんせう）の多いところ

で船にとっては難所であつたといわれている。たまたま唐（から）からやつて来た船（ふね）がその暗礁（あんせう）にぶつかつてあつたというまに沈（しづ）んだという。

今、唐船（からぶね）がぶつかつたといわれる暗礁（あんせう）の一部が唐船公会堂（からぶねくわいどう）の前に保存（ぼぜん）されている。幅（ひろ）一・五メートル、奥行き（おくみ）高（たか）さはいずれも一メートルほどの褐色（かっしやく）の石（いし）であるが、大正十三年（一九二四）に里見川（さとみがわ）の河床（かふだ）工（こう）事（じ）が行（い）われた時（とき）、掘（ほ）り出（だ）されて国道（こくどう）二（に）号（ごう）線（せん）沿（よ）いに置（お）かれていたものを、昭和十七年（一九四二）に唐船公会堂（からぶねくわいどう）が建設（けんせつ）された折（ひ）りに地元（ぢげん）の人々（ひと）の手（て）によつて移（うつ）され保存（ぼぜん）されたといえられている。

また、唐船（からぶね）から西（にし）へ約（やく）一（いち）キロメートルの金光町（きんこうまち）大谷（おほや）の夕崎（ゆふさき）の山腹（やまはら）には、難破（なんぱ）した船（ふね）の犠牲者（げいせいしや）を祀（まつ）った石（いし）のほこら「唐神宮（からかみみやう）」（高（たか）さ約（やく）一・三メートル）のおむすび型のほこらがある。「年末（ねんまつ）には皆（みな）んなで唐船（からぶね）さんにお神酒（かみさか）と赤飯（あかひ）をお供（とも）えしおす。昔（むかし）、難破（なんぱ）した船（ふね）の犠牲者（げいせいしや）に何（なに）の

手立てもせんか、たんで疫病がはやり、いつのころからが供養するようになったらしいと伝えられ、今ではここらへんでのただ一つの祭りです。と地元夕崎の住民の話にも熱のこもった言葉が聞かれる。



このもり塚全景とその入口の図

水島合戦之絵図から

